

平成22年度

学校評価

総括評価表

徳島県立富岡西高等学校

◎ 1 教科指導

		自己評価		評価サイクルの検証	次年度への課題と今後の改善方策
重点課題	重点目標	評価指標と活動計画	評価	学校関係者評価	
【1 教科指導】 授業、学習指導の充実と生徒の学力向上支援体制を確立する。	(全校レベル) 主体的な学習意欲の育成を図り、基礎学力を定着させる。	評価指標	評価指標の達成度	総合評価 (評定) B	評価サイクルの検証
	(下位組織レベル) 1) 教育課程の充実。	1) ①各教科・科目の単位数がバランスよくとれている教育課程になっているかを検討する。 ②選択科目の多様化を図り、普通科では50科目以上を開設する。	1) ①教育課程検討委員会を5回開き、各教科主任等と教育課程の検討を行った。 ②学校設定科目を含め普通科で74科目を設定した。	(所見) 学力向上を支援するさまざまな取り組みについては、概ねできていたが、昨年度と比較して欠点科目が増加する年次があるなど、達成できていない項目もあった。	1) ①大学入試制度の変更を見据えた検討を行った。理数科の文系志望者に対応した教育課程の編成も行った。今後は、大学入試制度変更と新学習指導要領を視野に入れた検討・変更を行う必要がある。
	2) 授業形態の充実。	2) シラバス(授業計画)の活用計画を立て、全体の指導で2回以上活用する。シラバスの改善も図る。	2) 1・2年次の年次集会やHR活動での科目選択・進路指導等で複数回使用した。		2) シラバスのさらに有効な活用方法が必要と思われる。
	3) 授業評価の導入による授業改善、教員の指導力強化。	3) ①授業評価を1学期・2学期それぞれ1回実施し、学力向上のための教科会も連動して実施する。 ②他の教員の授業を5回以上参観する。 ③予備校が主催する入試研究会や授業力向上のための研修に参加する。	3) ①1学期及び3学期にそれぞれ1回授業評価を行った。システムについては、大勢の先生方の意見を参考にして一昨年までのものに戻した。 ②1学期及び2学期で合計5回以上の授業参観を行い、参観記録が授業者に渡るようシステムを変更した。 ③駿台・河合塾・代ゼミ・ベネッセ等が主催する入試動向研究会・センター分析研究会に3年次担任を中心に複数回参加。また、小論文研究会等にも国語科教員を主に参加し、研修内容を推薦入試に生かした。		3) ①授業評価のシステムについて再考が必要だと思われる。 ②参観記録のシステムを変更したことで自分の授業についての意見を集約できるようになった。本年度は他教科を見る回数が多かった。
	4) 基礎・基本を中心とした放課後の学習指導。	4) 成績不振者・科目数を1学期・2学期・年度末と順次減少させる。	4) 1学期・2学期・年度末の各年次の成績不振(35点未満)者数(延べ人数)について、1学期に比べ2学期は1年次で大幅に増加した。2年次は1割減少、3年次はやや増加となった。		4) 1学期から2学期にかけて欠点者数が増加してしましたが、各学期の中間考査と比較すると期末考査では大幅に減少した。
	5) 放課後の主体的な学習活動。	5) 毎週月～金の放課後、社会科教室などの特別教室を学習室として開放する。	5) 毎週月～金の放課後、社会科教室・s-3・s-4講義室などを学習室として開放した。		5) 総体後の、居残り学習教室に負担なくどう教員を配置するか。更に検討が必要。
	6) 土曜日の学習活動。	6) 土曜日午前中の補習を2学期・3学期で12回実施する。	6) 2学期・3学期で1・2年次生に対し、計画通り12回の土曜補習を実施した。 (昨年度は13回)		6) 校外模試の成績を参考に講座レベル及び内容を選定しているので、直前の模試にも対応して実施できた。
	7) 長期休業中の学習。	7) ①1・2年次生：長期休業中の全員補習出席率90%以上。 ②3年次生：希望選択の補習出席率90%以上。 ③進学希望者による早朝・放課後マークトレーニングについて、必要な科目ごとの参加率80%以上。	7) ①1・2年次生全員補習(夏冬季出席率の平均) 1年次夏冬季補習 94.3%(昨年度94.3%) 2年次夏冬季補習 91.8%(91.7%) ②3年次希望補習 78.4%(80.2%)国数英 ③センター試験受験予定者202名による早朝マークトレーニングを実施 参加率68.7%(昨年度67%)・・2回国数英の平均		7) 副教材を活用して、特に苦手な分野や定着率の悪い分野に絞って授業及び演習を展開した。
	8) 家庭学習の確保・充実。	8) 単元テストCOMPASSの合格率を90%以上。	8) Compass合格率(50点満点中30点以上が合格) 1年次全体78.2%(昨年度83%) (国語90.0%, 数学70.3%, 英語74.2%) 2年次全体68.0%(昨年度70%) (国語70.3%, 数学57.9%, 英語75.8%)		8) Compass合格率では目標を達成できた教科もあるが、特に合格率の低い数学などは公式等を覚えていても、使いこなせていない。各分野の基礎問題の精選を図るとともに、反復練習の徹底をする。
	9) 自己管理能力の育成。	9) 学習・生活記録を毎日記入させることで、生	9) 学習・生活記録の毎日記入・提出により、生		9) 生徒の生活リズムや成績変動もいち早くキャッチでき、面談にも反映することができた。
10) 教育活動の広報による更なる充実発展。				10) ①HPの更新は1人の教員が担当しており、負担が大きい。 ④昨年に比べて1.5倍以上の中学生と保護者の参加があった。	

○新学習指導要領の数学・理科が先行実施される24年度の教育課程については、完全実施される25年度を考慮しながら検討する。

○シラバスの活用で実績をあげている高校の例に学ぶ。

○参観記録をもっと簡略化して、授業参観の心的負担を軽減する。

○教科会の回数をもっと増やし、また授業評価・授業相互参観が授業力向上に結びつくよう、教科会で結果を検証することが必要である。

○朝自習など、授業開始までの時間を有効活用する。

○Compass → 定期考査 → 課題テスト → (授業) → compass → …の黄金サイクルの意義(量・レベル・出題意図)を再確認するとともに、3回のテストで授業内容の徹底を図る。

○HP担当教員を複数にする。

○地域説明会の実施時期が校務多忙時期と重なるので、開催時期を検討する。

徒自身で日々の生活の中に学習習慣が定着できるよう、支援する。	徒自身が自らの生活を見直す機会とし、学習習慣の定着につなげることができた。
10) ①『HP』の更新を年間50回以上行う。 ②『PTA会報』を年間1回発行する。 ③小松島以南の中学校訪問を年2回は行う。 ④地域説明会を3個所以上で実施する。	10) ①『HP』の更新回数は30回であった。 ②『PTA会報』を1回発行した。 ③海部郡については訪問することができなかった中学もあったが、ほぼ実施できた。 ④地域説明会は4個所で実施できた。
活動計画	活動計画の実施状況
1) 弾力的な教育課程の編成を行う。	1) 入試制度の変化と選択の自由度を上げるため、地歴・公民の選択見直しを図ったり、新たな学校設定科目を設けた。 理数科の生徒が文系の学部を志望した時に、不利にならないように教育課程を見直した。
2) シラバスを活用することにより、ガイダンス機能の充実と科目選択時における利便性の向上を図る。	2) 1年次の入学時オリエンテーションでの履修の説明や、1・2年次のHR活動での科目選択・進路指導等で活用した。
3) ①授業評価の結果を分析し、各自が授業改善に努めるとともに、教科会で検討し、学力向上に努める。 ②相互授業参観月間で他の教員の授業を参観することにより、授業改善を図る。 ③授業力向上のための研修に参加する。	3) ①授業評価について、各自で分析してはいたが、教科会での検討などはあまり行われなかった。 ②1学期及び2学期で年間5回の授業参観はほぼ実施できた。
4) 定期考査前の放課後に基礎・基本を中心とした補習を実施し、成績不振者・科目数の減少を図る。	4) 中間考査で欠点のあった者は、弱点強化補習を行い、期末考査では大幅に減少したものの、昨年度と比べて欠点者が増加した年次もあった。
5) 社会科教室などの特別教室を開放しての放課後学習を実施する。	5) 毎週月～金の放課後、各年次のHR教室に近い、社会科教室・講義室を学習室として開放し、落ち着いた学習環境を提供した。 利用生徒の満足度92.1% 保護者の満足度96.0%
6) 土曜日において、英数国から2教科選択してテーマを絞った効果的な補習を実施する。	6) 9月12日(土)より1・2年次生の希望者286名(昨年度209名)に対し、英数国から2教科を選択させ12回の補習を実施した。(昨年度13回) 補習内容は、英数国各教科内で検討し、学習進度や実施時期に合わせた内容とした。 土曜補習を活用している生徒の満足度は84.3%、保護者の満足度93.8%
7) 補習等の出席率を上げ、学力向上を図る。	7) 長期休業中の全員補習出席率では90%を超え、部活動での大会参加等以外の欠席は非常に少ない。 土曜補習出席率での全12回の平均 1年次77.5%、2年次81.0% (ただし、一部試合等で公欠生徒を欠席に含む)
8) 単元テストCOMPASSを実施し、授業と家庭学習の連携を図る。	8) 中間考査で欠点を取得した生徒の弱点分野の補強にも繋がり、期末考査で解消に効果があった。

学校関係者の評価
理数科の教育課程で文転生徒に対応した教育課程が編成できているのはよい。
評価結果が次年度の取り組みに繋がるようにすべきである。
すべての検証結果について生徒とその保護者にできるだけわかりやすく知らせることで学校理解においてもより効果的になる。
これだけのことを実践しているのだから総合評価はAでよいのではないか。

		<p>9) 学習・生活記録を活用することで、生徒の自己管理能力を育成する。</p>	<p>9) 学習・生活記録の毎日の記入・提出により自分の生活を振り返り、自らを律する機会とすることができた。また、学習習慣・生活習慣についての指導に生かした。特に、定期考査前などには学習習慣を電算化し、比較検討を行い指導に生かした。</p>			
		<p>10) 『HP』による広報活動の充実、および『PTA会報』を発行する。中学校訪問や、地域説明会などで広報に努める。</p>	<p>『HP』の更新は十分ではなかったが、中学訪問や、地域説明会は計画通り実施できた。特に地域説明会では昨年比1.5倍以上の146名の参加者があった。</p>			

◎ 2. 生活指導

		自己評価		評価サイクルの検証	次年度への課題と今後の改善方策	
重点課題	重点目標	評価指標と活動計画	評価	学校関係者評価		
【2 生活指導】 規範意識の一層の向上（ルールを守る心，モラルやマナーを守る心の育成）に努める。	（全校レベル） I) 基本的な生活習慣の確立に努めるとともに，豊かな人間性や社会性を養う。 II) 学校，家庭，地域と連携し，生徒の心に響く生徒指導を行い，道徳性を涵養する。 III) 他者との関係を調整する力やコミュニケーション能力を育成する。 IV) 情報モラル教育を推進する。 V) 学校生活上，問題を抱え，支障をきたしている生徒・保護者に対する支援をする。 （下位組織レベル） 1) 基本的な生活習慣の確立 ① 正しく制服を着用させる。（頭髪・服装） ② 遅刻指導の充実。 2) 一人ひとりの生徒理解と個性の伸張を図る。 3) 生命の尊重と人権意識・道徳性の涵養 4) 教育相談職員研修会の推進（校内外）	評価指標 1) ① 常時指導を重視しながら全校集会や年次集会を通じて，頭髪服装検査を実施するとともに，基本的な生活習慣の定着を推進する。 ② 遅刻者を前年度より減少させる。 2) ① 保護者との連携を図る。 ② 面接週間を年間4回，各年次で全員面接を実施する。三者面談を年間1回実施する。 ③ 阿南寮・下宿訪問を実施する。 ④ 長期休業中に関係機関と連携し，合同パトロールを実施する。 ⑤ 年次会での情報交換を充実する。 ⑥ 特別指導の件数を減少させる。 3) ① 交通事故防止に努め重大交通事故ゼロを目指す。 ② いじめ問題講演会を実施する。 ③ 携帯電話安全教室・薬物乱用防止教室を開催する。 4) ① 教育相談研修会（年3回） ② 外部講師による特別支援研修会（年1回） ③ 特別支援の必要な生徒に対して，特別支援チームを編成しての取り組み。 ④ 校外関係諸団体による研修会への参加。	評価指標の達成度 1) ① 正しく制服を着用するという意識は高くなり違反者は少なくなった。しかし，頭髪服装違反を繰り返す女子生徒の指導に時間を要した。 ② 遅刻者数は微増，前年比4.8%増であった。 2) ① 長期休業前中に文書連絡を3回，年次通信を適宜を発行し連携に努めた。 ② 面接週間を4回，三者面談を1回，1・2年次の全員面接を実施した。それぞれの面接では生徒理解や支援，積極的な生徒指導に繋がった。3年次全員面接は行事の関係で実施できず。 ③④⑤を実施し生徒支援に努めた。 ⑥ 特別指導は昨年より3件増加した。 3) ① 重大交通事故発生しなかったが，交通事故は昨年より増加した。 ② 講師先生の都合で講演会は実施せず。1月アンケートで実態把握に努めた。 ③ 1年次対象にした。 4) ①②研修会を実施して研修を深めた。 ③ 特別支援委員会を開催。支援を要する生徒に対して支援の方策を検討するなどの取り組みをした。 ④ 3回研修会に参加した。	総合評価 （評定） B ----- （所見） 評価指標関連については概ね達成できた。教職員の協力体制により年次面接など積極的な生徒指導が展開できた。服装指導においても一部の違反生徒を除いては生徒の意識が高まったと判断できる。遅刻者が減少させるため指導方法を検討して取り組みたい。 教育相談室の利用方法を改善する必要がある。	評価サイクルの検証 1) 頭髪服装指導が身だしなみを整え，生活面の引き締めにつながるよう同一歩調での常時指導を重視していきたい。また，個別指導の強化や保護者と連携した指導が必要がある。週末遅刻指導は遅刻者の減少に繋がらなかった。遅刻防止への方策を考える。 2) 全員面接は生徒理解と生徒の支援に繋がった。面接者について教科担任に依頼するなど校内の連携を進めるとより効果的である。 3) 交通事故が増加した，交通安全教育をさらに進める。いじめの未然防止のため学校生活に関するアンケートの実施時期を早める。 4) 校内研修会で全ての教師が特別な支援を必要とする生徒についての共通理解をすることは必要である。 外部講師による研修会で生徒や保護者の対応について学ぶことは効果的である。必要な場合は専門機関の指導を積極的に勧める。	○ 全体的に頭髪・服装違反者は減少した。一部違反を繰り返す生徒については粘り強く指導していく。次年度もさらに教職員の共通理解を深め同一歩調で取り組んでいく。週末遅刻指導は継続して実施していくが，内容については工夫していく。 ○ 個人面接・三者面談を通して積極的な生徒指導を推進し自尊感情を育て自己指導力を身につけさせたい。 ○ 関係機関と連携を図り交通安全教育を進めていく。学校安全の日や交通安全週間の街頭通学指導を継続し交通事故防止に努める。生徒会を中心とした交通マナーアップ活動を充実したものにしていく。 いじめはあるものとの認識を持ち学校教育活動全体を通じて取り組む。命の大切さを知らせ，人権意識を基盤とした仲間づくりや人権意識・道徳心の涵養に努める。 ○ 特別な支援を必要とする生徒を支援するため保護者・関係中学・専門機関との連携をさらに進めていく。 別室登校の生徒の支
		活動計画 1) ① 頭髪・服装検査・再検査（毎月） ② 毎週末遅刻指導 2) ① 長期休業前文書連絡・年次通信・必要に応じて家庭訪問 ② 面接週間を4回，全員面接（3年次6月，2年次10月，1年次11月）三者面談を実施する。 ③ 阿南寮訪問・下宿訪問（1学期） ④ 合同パトロール実施（7月・3月） ⑤ 年次会情報交換の実施（各学期） 3) ① 交通マナーアップ活動（校門前のあいさつ運動・駐輪場での施錠の呼びかけ）を実施する。（週3回）	活動計画の実施状況 1) ① 全校集会，年次集会時に頭髪・服装検査を後日に再検査を実施した。 ② 毎週末，個別指導をした。 2) ① 長期休業前文書連絡3回・年次通信を発行した。 ② 3年次面接は実施できず。 ③ 阿南寮，下宿訪問を実施した。 ④ 夏祭に合同パトロールを実施した。 ⑤ 各学期さらに不定期に年次会を開催生徒の支援に努めた。 3) ① 生徒会を中心とした交通マナーアップ委員会，部活動の有志があいさつ運動を展開し交通事故防止を呼びか	学校関係者の評価 あらゆる場面で必要なマナーを身につけることは大きな財産になる。富西生には自己中心的な人間にだけはなあってほしくない思いがある。		

		<p>②自転車・原付自転車の整備点検し整備不良車は再点検を実施する。(年2回)</p> <p>③毎月、学校安全の日に街頭指導を実施する。</p> <p>④原付免許証取得者を対象に阿南自動車学校で実技講習会を実施する。</p> <p>⑤携帯電話安全教室や薬物乱用防止教室など、生活安全に関わる学校行事を実施する。</p>	<p>けた。</p> <p>②5月・10月に車体検査を実施した。</p> <p>③学校安全の日に学校周辺、阿南駅で街頭通学指導を実施した。</p> <p>④10月に阿南自動車学校で原付実技講習会を実施した。</p> <p>⑤6月に携帯電話安全教室、11月に薬物乱用防止教室を実施した。 4月に交通安全教室、1月に防犯教室を実施した。</p>			<p>援方法についてさらに検討する。</p>
		<p>4) ①特別支援教育研修の推進 ②発達障害への理解と校内体制の整備 ③発達障害のある生徒・保護者への支援と校外関係諸団体との連携強化</p>	<p>4) ①校外での研修会に積極的に参加し、外部講師による校内研修会を実施した。 ②特別な支援を必要とする生徒について共通理解の為の研修会を実施した。 ③特別な支援を必要とする生徒・保護者と面談をし、必要な場合は専門機関に相談し対応した。</p>	<p>全職員が特別な支援を必要とする生徒について共通理解をすることが出来た。</p> <p>必要な場合は専門機関を利用することも考える。</p>		

◎ 3. 進路指導

		自己評価		評価サイクルの検証	次年度への課題と今後の改善方策	
重点課題	重点目標	評価指標と活動計画	評価	学校関係者評価		
【4 進路指導】 進路設計と情報活用を育成する。	(全校レベル)	評価指標	評価指標の達成度	総合評価 (評定)	評価サイクルの検証	○低学年次に対する啓発活動を進路のHR活動で行う。 ○年次会で扱う内容について勉強会を持つ。進路問題についてのHR活動を生徒にとって魅力的な内容にするため、創意工夫が必要である。 ○今後も生徒の進路に応じた講演会・説明会を実施する。保護者部会はできるだけ参加しやすい時間に設定する。 ○PTA活動で、さらに多くの支部会の開催を期待する。支部会には必ず進路課員が参加し、説明したい。模試業者の検索システムの使い方について生徒に丁寧に説明する。
	I) 進路相談の充実を図る。	1) 全年次で個人面談を年間5回実施する。	1) 三者面談を含めた個人面談5回実施し、1・2年次は志望校を含めた進路先の絞り込みについて助言を行うとともに保護者への広報及び理解を促した。3年次は、年間を通して面談を実施することで、全ての生徒が納得のいくかたちで進路を決定していくことができた。	A	2) ①進路ガイダンスは、生徒にはおおむね好評である。 ②オープンキャンパスへの参加率は1年次で減少したが、全体では3年間で大幅に増加し、全ての年次について目標に近い数値である。	
	II) キャリア教育（職業観育成教育）を推進する。	2) ①学部系統別進路ガイダンス（1・2年次生）を実施する。 ②夏季休業中のオープンキャンパスへの参加率1年次40%、2年次60%、3年次80%以上を目指す。	2) ①徳島大学・鳴門教育大学等の講師を招いて学科・コース単位で27講座を展開した。 ②徳島大学・鳴門教育大学等の、夏期休業中及び秋季連休中でのオープンキャンパスへの参加率 1年次 30.4%(昨年度 35%) 2年次 64.8%(昨年度 56%) 3年次 79.8%(昨年度 76%)	(所見)	3) 各年次会で進路設計についてのHR活動のテーマや内容について、資料や入試情報等を集めるなど昨年度と比べて改善された。	
	III) 本校の進路指導を保護者・生徒に広報し、理解を促す。	3) 進路設計についてのHR活動を各学期2回実施する。	3) 各学期2回の進路HR活動のほか、各年次集会で進路に対する意識の高揚を図った。	評価指標については、よく達成できた。教職員の協力体制ができており、各年次・教科・課・係を中心に、全教職員の理解と協力による活動ができた。	4) ①進路講演会も生徒・保護者とも好評（平均80%が満足）。特に3年次の進路別集会は、専門学校・就職希望生にきめ細かいガイダンスが実施できた。 ②PTA支部会で進路課の説明を加えたことで保護者の参加が増えた。 ・3年次の学年PTAは本校職員による学校独自の内容に変え休日に実施したことで参加率が大幅に増加している。 ・1年次の翌年の履修科目選択の説明会も保護者の参加人数が大幅に増加した。 ・センター試験後の志望校判定の検索を自分で納得するまでできる点は生徒・保護者ともに好評であった。	
	IV) 総合的な学習の時間の充実。	4) ①各年次で進路講演会を年間2回実施する。 (生徒対象1回、保護者対象1回) ②PTA支部会における学校説明会に積極的に参加する。	4) 2年次は11月、3年次は7月に近畿大入学センター高大連携課長代理の屋木清孝氏を招いて進路講演実施し、1年次は10月にAi西武学院塾長を招いて、『部活をしながら難関大学に受かる勉強法』をご教授頂いた。また、1年次は第一学習社の小論文担当者から『推薦入試やAO入試における小論文入試』というテーマで講演を実施。		5) 特に、課題研究では、生徒の興味・関心を拡大し、生徒の漠然とした進路設計に具体性をもたらすことができた。課題研究での情報収集活動の意義等の確認と支援強化が必要である。	
	(下位組織レベル)	5) 修学旅行2日目にグループごとのテーマに沿った企業・大学訪問や職業体験などを実施する。	5) 東京大学農学部や医科学研究所をはじめ、警視庁・防衛庁などの数多くの官公庁を訪問し研修を行った。また、NTTドコモ・パナソニックセンターなどIT企業では先端技術を知ることができた。			
	1) 個人面談の充実。	6) 予備校・県高等学校進路指導研究会が主催する研修会に参加する。	6) 予備校の研修では、低学年の担任が参加し、全国の高等学校の課題解決事例を吸収した。また進路指導研究会主催の会では国語教育の課題・問題点について、県内他校と授業・小テスト・補習等意見交換をすることができた。(昨年は数学)			
2) 生徒個々の職業観育成を目指し、外部と連携した支援を推進する。	7) 総合学習テーマ「社会探究」において ①1年次では課題を発見し、各自の研究テーマを見つける。 ②2年次では研究テーマに沿って自主研究を実施し、年間1回発表会を実施する。	7) ①1年次では所属する講座を決めて、自主研究のテーマと修学旅行の研修先を決定した。 ②2年次では自主研究発表を、9月に実施し、自己の進路決定に役立てるため、進路ノートを使用した。				
3) 年次団等による相談体制・面談プログラム整備。						
4) 進路指導の系統的展開。						
5) キャリア教育としての総合的な学習の研修・検証・改善。						
6) 学校教育についての情報共有・交換を促進。						
7) 総合的な学習を通して自己のあり方生き方や進路についての自覚を高める。						

③ 3年次ではディベートと小論文を併せて年間6回実施し、表現力強化を目指す。

③ 3年次ではディベートと小論文を実施したが、例年以上に小論文指導に力を入れ進路決定に役立てた。

活動計画

活動計画の実施状況

1) 模試返却時は個別に返却し、データの見方や各自の勉強のポイントを指導する。

1) C A I 教室を利用し、模擬試験による合格判定システムの使い方を学ぶことで、志望校及び進路先までの具体的な目標値を設定させた。

2) 生徒実態に応じて適時、個人面接を行い、外部機関等とも連携し生徒・保護者を支援する。

2) 模試の成績を進路指導課が中心となって分析し、それをもとに各年次会及び教科会で課題を見つけ全ての教員がその対策に取り組んだ。

3) ①進路設計についてのテーマに沿ったHR活動を年次で実施する。
②各年次でテーマを決定し、進路指導を実施する。
1年次：望ましい職業観
2年次：学部学科の研究
3年次：受験までのスケジュール、志望理由、面接、教科別受験対策など

3) 各年次での各学期2回の進路HR活動とともに進路講演会や進路ガイダンスを通して、望ましい職業観の確立や学部学科の研究を深めることができた。

4) ①生徒・保護者対象の進路講演会を実施し、最新の進路情報を提供する。
②C A I 教室の利用を促す。

4) ①生徒対象の進路講演会とともに保護者対象の進路説明会で最新の進路情報を詳細に進路指導主事が説明した。また県外大学の視察研修を実施することで、各大学の現状把握に繋がった。
②C A I 教室を研修の下調べや研究発表・ディベートの資料集めの為に、授業時間はもちろん放課後も頻繁に使用した。

5) 進路設計への総合学習の効果を検証する。

5) 自己の関心のある講座に所属して研究を行うことで進路決定に役立っている。更に、進路ノートの活用によって、自己の適性や学部学科と職業との関連を深く知ることができた。

6) 総合学習の「富西プログラム」を生かして自己管理能力を育成する。

6) 総合学習における自主研究やディベートと小論文などは自己管理能力育成に繋がり進路決定に十分に役立てることができた。

学校関係者の評価

積極的に三者面談を重ねることで生徒とうまくコミュニケーションをとり、生徒に適切なアドバイスができていた点は大いに評価できる。

私立大学の特徴と生徒の個性を総合的に判断し、よりバランスのよい進学指導をすべきである。

指定校推薦枠をより積極的に活用し、将来性のある人材を引き続き育ててほしい。

それぞれの目標・具体的な手順を示し、その都度確認・検証できるプログラムに修正が必要である。

◎ 4. 人権教育

自己評価				評価サイクルの検証	次年度への課題と今後の改善方策	
重点課題	重点目標	評価指標と活動計画	評価	学校関係者評価		
【4 人権教育】 人権問題HR活動を充実させるとともに、学校生活のすべての場面で、相手の立場になって考え、行動できる生徒を育成する。	(全校レベル) I) 自らを尊重すると同時に他者を尊敬し、人権に対する鋭い感性を磨き、常に相手の立場に立って考え行動することのできる人づくりをめざす。 II) 日常生活の様々な機会を通して、人権が尊重された環境づくりに努める。 III) 人権問題に積極的に取り組む実践的な態度の育成を図る。	評価指標 1) 年間7回の人権問題HR活動を充実させることができたか。	評価指標の達成度 1) 人権問題HR活動を、各年次7回実施した。グループ学習や講義形式、ビデオ視聴やワークシート使用など、主題やクラスの状況に応じて様々な形でのHR活動が実施できた。	総合評価 (評定) A (所見) 人権問題解決と啓発に向けて様々な活動ができた。	1) 人権教育についての満足度は、生徒個々に判断基準がまちまちである。人権問題HR活動前の教職員人権問題研修会の中に年次会を設け、事前検討会として活用できた。 2) 「じんけん富西」や富西人権の日の評価について、教職員と生徒の間で評価に開きがある。 3) ①月一回の「富西人権の日」に関連行事を実施し、人権について考える時間や機会を持つことができた。 ②生徒の感想や意見を具体的に詳しく理解することができた。 4) 全校集会という場で、生徒人権委員長から全生徒に直接訴えることで啓発の効果は大きい。 5・6) 校外での人権問題研修会の開催の時期により、	
	(下位組織レベル) 1) 各クラスの人権問題HR活動の活性化。	2) 「じんけん富西」の内容の充実と年間5回の発行。	2) 「じんけん富西」は表裏印刷して年間5回発行し、人権委員会の意見や感想および教職員の意見を多く掲載できるようにした。	2) 「じんけん富西」や富西人権の日の評価について、教職員と生徒の間で評価に開きがある。		○人権教育についての満足度を客観的に図ることのできる仕組みを考えていく必要がある。HR活動の満足度等を見ると今後改善の必要を感じる。 ○生徒人権委員が「じんけん富西」の発行に携われるように工夫する。
	2) 人権啓発紙「じんけん富西」の充実。	3) ①富西人権の日を月1回実施。 ②人権問題講演会、映画会等の満足と事後指導の充実。	3) 正副担任のメッセージや人権講演会など、年間を通して行事の企画運営を行った。	3) ①月一回の「富西人権の日」に関連行事を実施し、人権について考える時間や機会を持つことができた。 ②生徒の感想や意見を具体的に詳しく理解することができた。		○「富西人権の日」の関連行事についてHR等で、生徒がテーマや内容を理解する差がないような説明をしていく。 ○講演会・映画会等は生徒の関心・理解・共感が得られる大きな行事であり、講師や映画の選定にさらなる研究や工夫が必要である。
	3) 人権問題講演会、映画会、全校集会等、学校行事の中の啓発。	4) 生徒人権委員会、社会問題研究部など生徒の自主活動の育成。	4) 人権委員会委員長や社会問題研究部の啓発活動の実施。	4) 全校集会での人権委員長による啓発活動、富西祭に向けての展示や社会問題研究部や人権委員会による自主研修を行った(11/6那賀川道の駅での「身元調査お断り」ワッペン運動、12/19中高生による人権交流集会に参加)。また、JRC部が児童福祉施設、老人ホーム、障がい者福祉施設等でボランティア活動を行った。		○社会問題研究部と生徒人権委員会の、より一層の連携が必要である。
	4) 生徒人権委員会、社会問題研究部など生徒の自主活動の育成。	5) 教職員人権教育研修の推進。	5・6) 教職員の校外における研修会等へ	5) 人権教育課から各年次に研修会参加を依頼した。また校内教職員研修では卒		○校務の多忙さを周囲が補う形で、多くの教職

<p>6) 学校, 保護者, 地域社会との連携。</p>	<p>の参加と校内教職員研修での報告会を年間2回実施。</p>	<p>業生の人権アンケートの結果報告, 新入生の人権問題意識調査の分析, 各種研修会の参加報告等について研修を行った。 6) P T A人権教育推進部研修(6/3), 親睦バレーボール大会(8/22), 那賀川道の駅での「身元調査お断り」ワッペン運動(11/6), 阿南市人権教育研究大会(2/5)に参加した。</p>	<p>他の校務と重なり参加できなかったという前年度の意見を受け, 各年次であらかじめ研修会の予定に合わせ, 研修に参加する人の予定表を組み, 計画的に研修会に参加することができた。</p>	<p>員が校外での人権問題研修会への参加できるように工夫するとともに, 研修会の予定と学校行事とのすり合わせを早い段階で, できるように努力する。</p>
<p>活動計画</p>		<p>活動計画の実施状況</p>		
<p>1) 各クラスの人権問題HR活動を各年次7時間設定する。HR活動については事前研修会を実施する。</p>	<p>1) グループ学習や講義形式, ビデオ視聴, ワークシート使用など, 主題やクラスの状態に応じて様々な形でのHR活動が実施できた。</p>	<p>生徒が直面するであろう個別課題について学校教育の持つ役割は大きい。</p>		
<p>2) 「じんけん富西」に人権委員会の意見を反映させる。</p>	<p>2) 「じんけん富西」を年間5回発行し, 毎回両面を使用し, 人権委員会の意見や感想および教職員の意見を掲載した。</p>	<p>人権問題学習は生徒の成長に欠かせない重要な取り組みである。多感な生徒の感性に訴えかけるような取り組みが必要ではないか。</p>		
<p>3) 富西人権の日(人権問題に関する行事)の企画, 映画会・講演会のHR活動で感想文の作成とアンケートを実施する。</p>	<p>3) ①富西人権の日を毎月1回実施した。 ②人権問題講演会, 映画会の後, 感想文作成や話し合いをHR活動で行った</p>			
<p>4) 全校集会での人権委員長による啓発活動, 富西祭に向けての展示や社会問題研究部による自主研修を行う。</p>	<p>4) 7月の全校集会で生徒人権委員長が啓発のスピーチをした。</p>			
<p>5) 校外の研修会等への積極的な参加と校内教職員研修会で人権意識について教職員間の共通理解を図る。</p>	<p>5) 人権教育課から各年次に研修会参加を依頼し, 校内教職員研修を年間4回実施し, その中で校外の研修会の参加報告を4回実施した。さらに校内教職員人権問題研修会の後で年次会を設け, 次回のHR活動指導演を検討する時間を確保した。</p>			
<p>6) P T A人権教育推進部での研修, 親睦バレーボール大会へ参加し, 親睦を深める。</p>	<p>6) 親睦バレーボール大会(8/22)に参加し, 親睦を深めることができた。</p>			
<p>学校関係者の評価</p>				

◎ 5. 特別活動

自己評価				評価サイクルの検証	次年度への課題と今後の改善方策
重点課題	重点目標	評価指標と活動計画	評価	学校関係者評価	
【5 特別活動】 学校行事や部活動のさらなる活性化を図るとともに、幅広く調和の取れた人材を育成する。	(全校レベル) 集団活動を通して、集団や社会の一員としてのよりよい在り方、考え方を育成するとともに、自己管理能力や自主的、実践的な態度を身につけさせる。	評価指標	評価指標の達成度	総合評価 (評定) A	評価サイクルの検証
	(下位組織レベル) 1) 学校行事と、部活動を充実させる。	1) ①学校祭へ来校する一般者数は600人以上。 ②学校祭をはじめとする学校行事の充実度80%以上。 ③部活動紹介や部活動顧問会議の内容充実を図る。 ④部活動への入部率80%以上。	1) ①学校祭期間中の一般来場者は720人であった。 ②生徒の学校行事に対する充実度は90%であった。 ③部活動紹介や部活動顧問会議の内容は例年並みであった。 ④部活動への入部率は84.5%であった。	(所見) 評価指標関連については十分達成できた。教職員と生徒が協力して各行事を安全かつ円滑に運営し、教育的効果をあげることができた。生徒の自主性の変化をみながら、支援の在り方を検討する必要がある。	
	2) 生徒会活動や各種専門委員会活動、ホームルーム、部活動が連携するとともに、それぞれの活動の活性化を図る。	2) 各種リーダー研修会を年間2回実施する。	2) 各種委員会を4月と10月に、ホームルームリーダー研修会を5月と10月にそれぞれ実施した。		
	3) 部活動を通して自己管理能力を高める。	3) 部活動部長会議を年間2回実施する。	3) 部活動部長会議を5月と11月に実施。また、全校集会で部活動生徒の心得や活動のあり方などを全体に呼びかけた。	1) ①学校祭は本年度も近隣高校と開催日が重なったが、目標とする一般来場者数は上回った。 ②学校行事に対する充実度は昨年並みであり、生徒は自発的によく取り組んだ。 ③部活動紹介・顧問会議は昨年同様の取り組みであったが、概ね良好であった。 ④入部率は昨年より4.5%下がったが、各部の活動は活発であった。	○年間計画の中で、それぞれの行事を可能な限りよりよいタイミングで設定する。 ○行事の計画・運営において生徒の教師に対する依存傾向が強まりつつあるので、自主性やたくましさを育成していくよう指導に工夫をしていきたい。形骸化してしまわないよう行事の内容を随時見直ししていく必要がある。
	活動計画	活動計画の実施状況	学校関係者評価		
	1) ①②学校祭を9月実施とし、一般公開する。その他、学校行事開催に際し、その意義についての事前指導を行う。また各行事終了後にアンケートを実施し検証する。 ③④部活動紹介、部活動顧問会議を実施する。	1) ①②文化祭を9月4・5日、体育祭を6日に実施した。文化祭の一般来場者は2日間で631名、体育祭には89名が訪れた。また、学校祭と球技大会で事後アンケートを実施し検証した。 ③④部活動顧問会議では、各部顧問への連絡のみならず、部活動運営のあり方や意義について共通理解を深めた。	2) ①②文化祭を9月4・5日、体育祭を6日に実施した。文化祭の一般来場者は2日間で631名、体育祭には89名が訪れた。また、学校祭と球技大会で事後アンケートを実施し検証した。 ③④部活動顧問会議では、各部顧問への連絡のみならず、部活動運営のあり方や意義について共通理解を深めた。	特別活動を通じてしっかりした自主性のある生徒を育ててほしい。富西生から将来起業家になるような人材が出てくることを望む。	
	2) 各種専門委員会、ホームルームリーダー研修会を実施する。	2) 内容の整理を図るとともに自主的活動となるよう促した。	3) 部活動のあり方やリーダーとしての心構えについて生徒に確認・指導ができた。	個人の興味・関心を部活動に反映させるような組織的取り組みがあると、より個性のある生徒が育つのではないか。	

◎ 6. 環境教育

自己評価				評価サイクルの検証	次年度への課題と今後の改善方策
重点課題	重点目標	評価指標と活動計画	評価	学校関係者評価	
【6 環境教育】 環境問題の理解とその解決への実践、および身の回りの環境美化の推進	(全校レベル) I) 環境問題に関心を持つと共に自然や資源を大切にすることを育成する。 II) 校内外の環境美化活動を推進し、公共心や奉仕の精神の育成を図る。 (下位組織レベル) 1) リデュース・リユース・リサイクルを推進する。 2) 節電・節水に取り組む。 3) ごみを正しく分別する。 4) 清掃活動に積極的に取り組み環境の美化に努める。	評価指標 1) 印刷用紙の削減を意識して印刷を行う。(用紙使用量を昨年度比5%削減する。)	評価指標の達成度 1) 印刷用紙の削減を意識している教職員は98%であった。	総合評価 (評定) B (所見) 評価指標の達成度については、達成できないものもあったが、目標は概ね達成できた。また、ほぼ年次を追うごとに達成度は高まっており継続的な取り組みの効果が見えてくる。	評価サイクルの検証 1) 印刷用紙の削減を強く意識している教職員は50%に留まっており、さらに意識を高める必要がある。用紙使用量は購入総枚数について比較し、5%の増であるが、年度末の購入量の差異により年度間のばらつきが大きいと思われる単純比較は困難であると思われる。 2) 冷房28℃、暖房19℃のエアコン温度設定を進めたが、設定温度と実際の室温とが異なるため十分な徹底ができなかった。 3) 男子生徒の5%、女子生徒の1%の者が、ゴミの分別に注意を全く払わないと答えており、不十分な分別につながっている。これらの生徒に対する指導が必要である。 4) 清掃に真面目に取り組めていない生徒は20%であるが、このうち4%の生徒は全く取り組めていないと答えており意識向上への方策が必要である。
		2) 節電・節水を意識している生徒・教職員が8割以上	2) 節電・節水を意識している生徒・教職員は69%であった。		
		3) ごみの分別に注意を払っている生徒・教職員が8割以上	3) ごみの分別に注意を払っている生徒・教職員は87%であった。		
		4) 清掃に真面目に取り組んでいる生徒が8割以上	4) 清掃に真面目に取り組んでいる生徒は80%であった。		
		活動計画 1) 用紙の使用量を過年度比較し、再利用可能な用紙の活用、必要部数だけの印刷を促す。	活動計画の実施状況 1) 印刷室に、印刷枚数の目安として必要枚数+5%以内の印刷と裏紙の使用を促す掲示を行い、用紙削減を呼びかけた。		
		2) ①毎月の電気・水道使用量を過年度と比較し、その結果と共に電気使用量に対する二酸化炭素排出量を全校生徒に知らせ、環境問題への意識を高める。 ②電灯のスイッチや水道の蛇口に節電・節水を呼びかける表示を行う。 ③環境委員会を中心に各HRで消灯・エアコンの温度設定を徹底する。	2) ①電気・水道使用量の過年度比較および使用量に対する二酸化炭素排出量を示すポスターを作成し、各HRに掲示すると共に、環境委員会から各HRで呼びかけを行い啓発を進めた。 ②教室の電灯の電力とその使用に伴う二酸化炭素排出量を示したシール・エアコンの適正温度を示したシールを作成し、環境委員会に各HRの電灯スイッチ・エアコンリモコン周辺に表示させた。 ③環境委員会で、環境委員会が率先し各HRで不要時の消灯・エアコンの適切な温度設定を進めるように指導した。		
		3) ①環境委員・部活動代表者対象にごみ分別教室を実施する。 ②環境委員等でごみ分別推進ポスターを作製し、各HRに掲示し啓発を進める。	3) ①学校祭前や長期休業期間前に環境委員・部活動代表者を集め、ゴミ分別教室を実施した。 ②情報の授業の中でゴミ分別推進と節電・節水を呼びかけるポスターを作成し、掲示板に掲示した。		
		4) ①校内の清掃活動を全員が時間いっぱい取り組むよう徹底する。 ②月に1回クリアデスクデーを設け、生徒・教職員の机・ロッカー周りの整理整頓を進める。 ③環境委員会を中心に通学路の清掃活動を行う。	4) ①環境委員会で、環境委員会が清掃活動の中心的役割を果たすよう指導した。 ②クリアデスクデーのある週の初めに文書を配布し、整理整頓を進めた。また、厚生委員会を中心に教室ロッカー周りの整理を進めた。 ③JRC部を中心に校外の清掃活動を行った。	学校関係者評価 ゴミの分別など身近な取り組みは家庭での教育が大切である。今後も高い意識で取り組んでほしい。	